

委託事業実施内容報告書

平成20年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【日本語能力を有する外国人を対象とした日本語指導者養成】

受託団体名 財団法人箕面市国際交流協会

1 事業の趣旨・目的

- ・ おもに外国人当事者によって構成される企画委員会の一部に実践紹介的な内容を盛り込み、それを部分的に公開しながら「相互養成講座」化させることによって、当事者のエンパワーを図る。
- ・ 前述、企画委員会にて共有された実践(模擬授業等)を、学校・語学教室・日本語教室参加者等を含む他会場にて再実践し、その再構築の過程の中で自信を深め、指導者としての応用力を養成する。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
2008年 11月8日	千里文化センター・コラボ	太田、大谷、斎藤、 鮫島、謝、崔、張、 ネルソン、萩原、 福井、中津、 ロクガマゲ、劉	①主催者(協会)挨拶 ②養成講座の概要 ③自己紹介と意見交換、 役割分担	議事録参照
2008年 12月13日	千里文化センター・コラボ	呉、太田、大谷、 斎藤、鮫島、謝、 崔、張、ネルソン、 萩原、福井、中津、 劉	①講師3名による模擬 授業、ボランティア等 によるコメント・質疑 応答 ②企画委員会ミーテ ィング	議事録参照
2009年 1月10日	千里文化センター・コラボ	太田、斎藤、鮫島、 謝、崔、張、 ネルソン、萩原、 福井、中津、 ロクガマゲ、劉	①講師3名による模擬 授業、ボランティア等 によるコメント・質疑 応答 ③企画委員会ミーテ ィング	議事録参照

2009年 2月14日	千里文化センター・コラボ	呉、太田、大谷、齋藤、鮫島、謝、張、ネルソン、萩原、福井、中津、劉	①事務局から進捗報告 ②講師・コーディネーターの打合せ	議事録参照
----------------	--------------	-----------------------------------	--------------------------------	-------

【写真】 第2回模擬授業(第3回企画会議 2009年1月10日)



3 研修講座の内容について

- (1) 研修講座名 「わたしが伝えたい『日本』」
- (2) 研修の目標
- ①外国にルーツを持つ指導者が知り合うことによる更なるエンパワーメントと応用力の醸成
 - ②一般公開を通じた①の深化、及び地域社会への啓発と浸透
- (3) 受講者の総数 87人(模擬授業は含まない)
- (4) 開催時間数(回数) 11.5時間 (全6回)

(5) 参加対象者の要件

特になし

(6) 受講者の募集方法

公募したデザイナーによる広報チラシの作成、また当協会の情報誌『めろん』及び箕面市広報『もみじだより』などに情報掲載し、地域へ広報。また、市教委を通じて市内全小中学校へチラシ配布を実施。

(7) 研修会場

千里文化センター・コラボ(豊中市)、箕面市国際交流協会(箕面市)
萱野中央人権文化センター(箕面市)、平野人権文化センター(大阪市)

(8) 使用した教材・リソース

特になし

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
3月11日(水) 13:30～15:30	「3つの文化・個性豊か・人間好き～日本人の親に育てられたユニークな私」 「父・被害者と加害者・相互理解と成長～韓国と日本」	鮫島メーリ(英会話講師) 崔聖子(韓国語講師)	42名
3月13日(金) 15:00～17:00	スリランカ出身のご両親を持つ2世のネルソンさんに日本での経験、「私のままでいい」と思えるまでの足取り、また国際結婚をした福井さんに中国と日本の教育・子育ての方法の違い、日本でのご苦労など。	ネルソン百合子(英会話講師) 福井優紅(中国語講師)	22名
3月27日(金) 19:00～20:30	留学生が日本語の漢字教育の中で感じた「困惑」や面白さ、「ほう・れん・そうビジネス」の前に考えたい日中間の文化の違いなど。	謝福台(大阪大学院生) 張茜(日本語・中国語講師)	10名

3月28日(土) 14:30~16:30	外国にルーツを持ち子ども の時に来日、または両親 が外国人で日本で生まれ 育った二人から、学校生 活、言葉のこと、アイデン ティティ、周りの人との関わり や思い、望むことについ て。	ネルソン百合子(英会話講師) 劉正宜(大阪大学学生)	13名
-------------------------	--	-------------------------------	-----

(10) 講座の評価

①受講生に対するアンケート

日時:2009年3月11日	講師:鮫島メーリ、崔聖子	場所:箕面市国際交流協会
参加人数:42人(内訳 男9 女33)		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 極めて公的な場で、言い難い差別のことプライベートのことをオープンにして頂くことで、日本と外国の違いや日本の良さも理解できた。 ・ 講師の方が生き立ちや思われていることをストレートに話していただき、ショックを受けたり、感情が動いたりしました。苦労されているのに日本に対して、希望を持っておられる前向きなところに励まされました。 ・ 日ごろほとんど考えることのなかった日本について考える機会になりました。 ・ 国際化してきたと言われ久しい日本社会だが、一般的な生活のレベルにはまだまだ浸透していないと感じる。特に、アイデンティティの形成されていない子どもが直面する社会(学校)が国際化されていないケースが多い。メーリさんのおっしゃる「つらい経験」を次世代には減らしていけるよう、多文化を受け入れる環境を大人が作られて行く必要があると思った。 ・ 今日私が聞いたことを、機会あるごとに家族に、友人に伝えていきたいと思う。 ・ 問題点についてパネルディスカッション等にて掘り下げてほしかった。 		

日時:2009年3月13日	講師:福井優紅、 ネルソン百合子	場所:箕面市国際交流 協会
参加人数:22人(内訳 男5 女17)		

- ・ 日本語教師として働いていく上で、今後の為になるのであろう新しい考え、価値観を得ることができました。
- ・ 中国での出産・子育て・教育の話はとても新鮮で面白かったです。
- ・ 人間は生まれたところは選べないという事、それぞれの境遇に負けずに生きていることが良かったです。

日時:2009年3月27日	講師:謝福台、張茜	場所:萱野中央人権文化センター
参加人数:10人(内訳 男1 女9)		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容は新鮮で面白かった。生の声が聞いてよかった。 ・ パワーポイントを使って視覚的にすごく分かりやすかったです。今まで考えたことのない漢字のこと、日中ビジネスマナーの違いの話がとても印象に残りました。 ・ 周囲を気遣った話し方がすこし痛々しかった。少数者だと常に気を使わなくてはならない大変さを想像した。 		

日時:2009年3月28日	講師:ネルソン百合子、 劉正宜	場所:平野人権文化センター
参加人数:13人(内訳 男3 女10)		
<ul style="list-style-type: none"> ・ お二人とも自分の事、自分の家族の事を冷静にとらえられており、まず、その点に驚きました。それも今までの経験があったからこそだと感じました。すごく自分の意志、自分とは何か、そうあるべきかという強い気持ちを持っているというのに感心しました。 ・ 実際の体験談や生の声が聞いて大変良かったです。平野で暮らす人と少し違う環境の人のお話で興味深かった。 ・ 最後にディスカッションができてよかった。 ・ 外国人の方の思いが改めてよく分かった。今後のボランティアの参考にしたいと思います。 		

②実施主体からの研修内容結果評価

今回の講師になった6人の外国人当事者は、特に「××の研究者」、または「××の専門者」といった社会的に地位的に認められている周知の人ではなく、留学生または国際結婚をして子育ての傍らに地域で活動を行っている人、英語講師など私たちが生活の中で接する頻度の高い外

国人当事者である。これら様々なバックグラウンドを持っている当事者が彼らの経験を一般市民に語ることによって、主催側の企画ねらいにある指導者としての応用力の養成が達成られるのと同時に、私はこのような市民と市民との直接対話の機会を提供する場という視点で今後の役に立つ大事な試みだと思う。当事者たちの価値観・経験を聞くことによって、聴講者が今まで当事者との関わりの際に意識していなかったことが分かり、これからも増え続けていく当事者とともに地域社会を築いていくための不可欠な相互理解を認識する場であった。更に、同じ外国人当事者として講演を聞く外国人もこの機会に共感を得たり、ヒントを手に入れたりすることができ、多くの外国人自身にも影響を与える効果を持っている。しかし、今回外国人当事者が来場するのがそれほど多くないというのが現状だった。一般市民の日本人に加えてもっと外国人当事者にもこの企画の面白み・意義を知ってもらう必要があると感じた。 (文責:劉)

③実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

限られた機会ではあったが、当事者が「臆することなく話してよいのだ」、そしてまた「今、言わないと、子どもも同じような思いをするのだ」という気づきと奮起の場となった。そのことは、外国人当事者が過半数を占める環境設定、「模擬講座」という周囲の様子を伺うことができる準備空間を経ていたからこそ、「一人ではない」「少しでも本音を語ろう」という力につながったと思われる。本質的な議論や自己開示は信頼という土壌に立つからである。そうでなければ、「(外国人)指導者」は存在したとしても表層的な関係や「場」にとどまり、まさに人を変えゆくような厚みのある「指導」は成立しない。

外国人当事者が教科書の例文を読み上げるのではなく、安心感の中で自らの思いを語る時、その表現力は最大限に発揮され、説得力を持った。社会の一層の多言語化が期待されるが、現実問題として日本語のスキルの向上なくして高次元での社会参加は難しい。同時に、言語によるコミュニケーション以外の難しさもある。「少数点在地域で声を上げること」に対する「躊躇」という障壁はマイノリティ側でなく、むしろ地域社会のマジョリティ側からの相当に積極的な関わりがないかぎり解消されにくいのではということが浮き彫りとなった。外国人当事者の講座前後の緊張と安堵の様子から—とくに大都市でなく個人が社会に紛れることが困難な地域では—多文化共生社会づくりとは決して彼女たちの個人努力にのみ期待されるべきものではない。そのことを再確認し、同時に、まだまだ見えてこない、さらに声が上げにくい外国人当事者の存在に思いを馳せる機会となった。模擬講座に参加したある日本人は、「本当はもっとたくさん言いたいことがあるのだろう」と得心し、少し驚いた様子だった。ふだん圧倒的多数の、しかも善意の日本語ボランティア等に囲まれている時、当事者の多くからネガティブな感情表現はほとんど表明されないからである。

今回は半年間の委託事業であり、事業周知機関は4ヶ月ほどの短期間であった。また、初めての取り組みでもあった。プロセスにおいて企画委員の一部を公募するなど参加型を心がけたものの、おそらく参加を躊躇した層もあるだろう。まずはこうした地域に埋もれがちな、あらゆる社会資源から遠く離れた「慎重な」外国人当事者に対して求心力を持つべく、当協会の事業方針を丁

寧に発信し、地域に根付かせていくことが重要であろうと思われる。そうして当事者の信頼感を獲得できてこそ、「私が住む『日本』を日本語でありのままに伝えよう」という動機、ひいては「指導者」養成につながるのではないだろうか。

(文責:中津)

(11) 事業の成果

(ア)他事業との連携

流動性や匿名性が低く、職住一致型のライフスタイルを持つ市民も少なくない土地柄で、外国人当事者は「社会参加」について慎重深くならざるを得ない。一方で、地域の国際化の実態を「新たな風」として恐れず受け止めようとする人々も確かに存在する。その「慎重さ」と「(受身の)善良さ」の橋渡しが必要だった。ともすれば飛んでいってしまう「パステル」な関係だけではなく、正面からありのままを直視しようと関係再構築を試みる企画となった。

研修の受講者はおおむね当協会の日本語ボランティアまたは語学講座参加者であった。彼女たちにとっては、「顔見知りの△△出身の〇〇さん」や「××語を教えているらしい〇〇さん」にあらためて、しかし初めてその人生史や本音の部分聞く機会となった。受講者は、「〇〇さん」の笑顔の裏の壮絶な経験に絶句しつつ、誰もが「(多文化共生)社会づくり」の当事者であることを再確認し、「〇〇さん」から信頼をもって「ボール」を投げられたパートナーとして、その役割や地域社会でできることを考えるきっかけとなった。話し手である「〇〇さん」と受講者との関係がより実質的なものになったことは、「〇〇さん」が会議後の雑談の輪から抜けられずにいるほのぼのとした様子から十分に伺えた。「〇〇さん」との関係が深まった受講生の事業参加継続の意欲、およびそうした積極姿勢は隣接するテーマで活動している他グループの関係者へも刺激をもたらした。

本音を語る時、話す側のみならず聞く側にも一定の負荷がかかる。「外国人マイノリティ」と「日本人マジョリティ」は相反するものとして対比されがちだが、マジョリティ側がマイノリティの人生史を受け止め、そのどこかが自分自身に重なる瞬間—つまり「共感」を経た時、二者関係は水平に変容し、相互に深いコミットメントにつながる事が分かった。また、少数点在地域の顔の見えるコミュニティにおける個々人の微妙な変化は、研修会の発案やさらなるリーダーシップの成長などという形をもって、身近な事業や近隣地域の教育関係者グループへ伝播しはじめている。

(文責:中津)

(イ)研修後の人材活用

とくに外国人企画委員はそれぞれ「指導者」としてすでに地域社会の中で能力を発揮する場を少なからず構築しているが、その価値を地域全体で周知し、十分評価されているとは限らない。また、少数点在地域ゆえ、時に個人への作用が偏重すると特定個人の自我が「肥大」することもある。いずれにせよ地域社会との関係性の課題である。今後、彼女たちの声が「珍しい」ものでも「特別扱い」でもなく、さまざまな既存制度においても当然のように盛り込まれ、効果を持ちえるよ

うな日常化にむけた取り組みが必要である。個人の努力ではなく、「場」の醸成と量的拡大が求められている。つまり、当協会の事業、たとえば語学講座の講師や国際理解教育等の派遣講師として「ピン・ポイント」での活用はもちろん可能だが、第二・第三の彼女たちが集い生まれてくるような、飾らない「声」が出せるような、日常的な「場づくり」の中でのコーディネーターのような役回りが、遠回りのように見えて実は着実な「人材」づくりにつながるようにも考えている。そのことは、本事業で会議準備・委員折衝・資料整理作業を通じて著しく表情が変化した、若い帰国者 3 世の劉正宜の成長ぶりからも伺い知ることができた。 (文責: 中津)

(12) 今後の課題

今回は制限時間に合わせ追われる形で、会議や講座等のスケジュールを調整した感が否めない。企画委員会で気心が知れはじめ、ようやく力が抜けて数々のエピソードが語られる頃はすでに最終会議だった。「話はこれからやんか〜！」という名残を惜しむ声はその場の得難さを物語っていた。少数点在地域に住む外国人当事者が「(本質的な部分は)語れない／語れなかったのはなぜか」という課題がやっと明らかになりつつも時間が不十分、これからが本番なのという外国人企画委員の声が収穫であり、課題として残された。

また、年度途中で助成申請を行なったため、企画内容はほぼ事務局案とおり、企画委員からのアイデア等を活かす余裕はなかった。また、既存の当協会事業との連携を想定したが、すでに個別に事業展開する中で予定が入っているなど兼ね合いが難しかった。学校教育現場にも市教委を通じて全校配布したが、3 月は学年末であり、関心を持たれながらも結果にはつながらなかった。幅広い見識をもつ多数の企画委員の参加を得ながら、実質的な参加型事業とは程遠い設定となったことは今後ぜひとも改善していきたい。 (文責: 中津)